

ホツキガイ稚貝の機械採集

増 殖 部

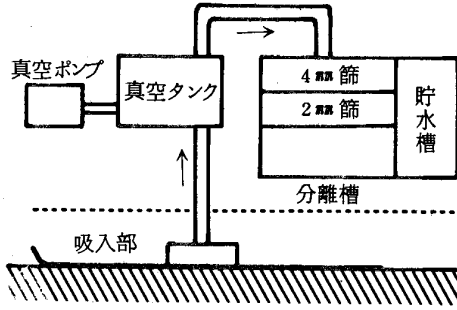
ホツキガイは北海道における重要な浅海貝類資源であるが、その生産量は漸減傾向を示しており、昭和四九年度の漁獲量は二、九六二ト（北海道水産現勢）で、最盛期の二分の一程度である。この種は北海道海面漁業調整規則により穀長制限（七、五cm）、及び産卵期保護のための禁漁期間が設定されており、さらに自主規制を加えている漁協も多く、漁獲量は各漁場ごとに資源調査を基にして定めている。このような漁獲管理は、それぞれの海域で徹底して実施され、資源の維持が計られているが、積極的な増殖対策としては移植等が行なわれているにすぎない。

ホツキガイの減耗は害敵生物による食害も見られるが、底生期に移行した稚貝が波浪等により打ち上げられることが主因と考えられ、二年貝に成長するまでに多くとも一〇程度しか生残れないとされている。この時期に適切な手段を講じて、減耗を防止することがホツキガイの増殖対策として有効であり、これまでも潜提などの試験が実施されているが減耗防止には至らず、むしろ集苗施設としての有効性が確認されている。今回の試験は、この時期のホツキガイを機械的に採集して、中間育成を行うための第一段階として、機械採集が可能かどうかを検討したものである。別海

町床丹のホツキガイ保護水面において、昭和五〇年一〇月三〇日〜三一日に実施した。

採集機械

採集機械は第一図に示したとおり、吸入部、真空ポンプ及び真空タンク、分離槽から構成されている。吸入部では真空タンクの減圧により、稚貝等が砂、海水と共に吸い上げられ、真空タンクに収容される。真空タンクが満水すると、弁を操作してタンク内を加圧し、分離槽へ排出する。この吸入、排出の過程は約一、五分要する。分離槽は4^部、2^部の金網



第1図 採集機械の構成

が設置されており砂と生物を篩分けする。吸入部は長さ一、五mの櫓の中央部に三四〇×四八〇×五〇^部の枠を設置し、その上部に一〇〇^部φの硬質ビニールパイプが連結しており、微速で航行しながら採集することが可能である。

採集生物

採集された生物はホツキガイ、エゾバカガイ、オオミゾガイ、カシパン、シオムシ、多毛類が主で、第一表に示すとおりである。個体数ではホツキガイ稚貝が大部分で、四^部篩ではカシパンの比率がやや高かった。採集されたホツキガイはほとんどが当年貝である。四^部篩で選別されたものには一年貝も含まれ、平均殻長九、一三三、一^部、二^部篩では三・七五〇、五^部で、分離槽に残留した砂中から一^部篩で再度分離された稚貝は二、七五〇、三^部である。採集個体数は一〇回の吸入、排出により四^部、二^部篩に残留したものは一二〇〜二〇〇個体、一^部篩で選別されたものは前者よりも多く、四五〇個体が得られた。この個体数は周囲の一般漁場の稚貝分布と比較すると、約一五^mに生息するホツキガイ稚貝の数に相当する。

今後の問題点

今回の試験はホツキガイの減耗が生ずる以

第1表 採集された生物の種類

生物の種類	No 1		No 2		No 3		No 4		
	4 ^部 篩	2 ^部 篩	4 ^部 篩	2 ^部 篩	4 ^部 篩	2 ^部 篩	1 ^部 篩	4 ^部 篩	2 ^部 篩
ホツキガイ	28	89	73	115	67	152	450	44	92
ホツキガイ破損	1		2					2	
エゾバカガイ	1	6	4	4	21	20	ホツキ稚貝のみ選別		
オオミゾガイ	8		15		13	1			
カシパン	74	2	77		63				
シオムシ	27	7	65	4	51	1			
端脚類		2		3		7			
クマシヤ		2				2			
エビ			1		7				
多毛	3	5	4	5	6	2			

前に機械的に採集し、その要因の小さい海域や陸上施設で中間育成を施すことを目的として、その採集方法についての検討を行なったものである。稚貝採集そのものについては、今回の方法で十分効果があると考えられるが、量的に稚貝を確保するために、吸入部、分離

槽などを改良する予定である。又、今回実施できなかった、輸送や中間育成試験も五一年度を実施する予定である。これらは漁業協同組合、機械専技、普及所、各水試の協力により五一年九月～十一月にかけて行う。

(水産増殖、二四巻に印刷中)

予想価格は、一Kg、一、〇〇〇円～一、三〇〇円位とのことである。

魚肉は、カマボコ状の弾力のある製品しか出来なかつたものが、肉状の弾力のある製品が出来、かつ乾燥品、冷凍などの不要であるという新製品は、魚肉に新たな需要途を開